



学会発表はなんのために

本田 哲也

浜松医科大学皮膚科学講座教授

そのとき私は、初めてのヨーロッパ研究皮膚科学会の、social gathering(懇親会)に参加していた。芝生の広場のところどころにテントを張った、夜空がみえるアウトドア形式の懇親会会場だったと記憶している。同じ教室から何人か一緒に参加していたのだが、暗いし人は多いので、いつのまにか離れ離れになってしまった。仕方ないのでお酒を片手に芝生のうえを1人でぶらぶら歩いていたところ、とある日本人の先生に出会った。こんにちは、という挨拶の後しばらく、今回の発表内容などについて会話をしていたら、突然その先生から「学会発表はなんのためにすると思いますか?」と質問された。「最新情報の共有のためでしょうか」など、ムニャムニャと答えたところ、先生は首を横に振られ「それはねえ、共同研究者にお礼をいうためなんですよ」とおっしゃられた。「研究は1人ではなく、いろいろな先生の協力によって成り立っている。だけど、普段の生活ではそういう先生にお礼をいう機会がなかなかない。なので、学会発表のときに、謝辞でしっかりお礼をいう。謝辞はきちんと入れなきゃだめだよ」と。

なるほど、と思った。それまでの発表で、スライドに謝辞を入れていないことはなかったが(あったかも)、学会発表の目的とまでは思っていなかった。でも、考えてみれば、研究にしろ、診療にしろ、いろいろたどってみると一つの事柄に本当に多くの方が関係していることがわかる。そのときの学会で

聞いたいろいろな研究の話はまるで覚えていないが、懇親会でうかがったこのお話は、その後もずっと心に残っている。

新型コロナの影響で、各種学会、研究会が軒並み中止、延期になっている。それに伴い、懇親会、二次会等もまったくない状態である。幸いWeb会議、Web開催システムが徐々に整っているようで、発表内容の情報を得る意味ではある意味、便利になった。これまで学会場に出向かないと聞けなかった発表が、自分のオフィス、自宅から聞けるのはある意味効率的であり、新型コロナの収束以降も、Web配信システムはなんらかの形で続いたらいいなと個人的には思っている。ただ、全面的なWeb開催の場合、ふとした出会いから、自分の心に残る話を聞く、というような機会はどうしても失われてしまう。早く社会が落ち着いて、情報の効率的収集と、人とのふとした出会いの機会が両立・復活するときを心待ちにしている。

ちなみに、そのとき私が出会った先生とは、北海道大学皮膚科名誉教授の清水宏先生である。まったく医局も異なる私に、フランクに貴重なお話をしてくださったことを、この場を借りて改めて厚く御礼を申し上げます。